

基礎講座

第41回

遊びでいやされる子どもの心

東日本大震災では、生まれ育ったふるさとの町や村が瓦礫へと一変した風景を多くの子どもたちが目の当たりにしました。家が流され、住む場所を失ったり、大切な家族や友達を失くしたショックはあまりにも大きく、子どもたちは心に深い傷を負っています。被災した子どもたちの心の傷を最小限におさえ、心理社会的な支援をしていくことが必要だと訴えられています。子どもたちへの心のケアの一環として、日本ユニセフ協会は、「遊び」がもたらすいやしに注目して、さまざまな支援活動を行っています。



©日本ユニセフ協会
「子どもにやさしい空間」で
ボランティアと遊ぶ女の子

「子どもにやさしい空間」

震災直後、日本ユニセフ協会は避難所に「子どもにやさしい空間」をつくりました。「子どもにやさしい空間 (Child Friendly Spaces=CFS、以降CFSとする)」は、戦争や災害などの緊急事態において子どもたちを一時的に保護し、心のケアを助ける、子どもが安心して遊ぶための場所です。ユニセフは、CFSを子どもを適切に保護するための大切な手段のひとつと考えています。

CFSの実施のために、デンマークのコペンハーゲンにあるユニセフ物資供給センターからは、「箱の中の幼稚園」が届けられました。「箱の中の幼稚園」には、指人形やパズル、積み木、記憶ゲームなどの知育玩具が入っています。災害時、強いストレスがかかっている時期に、楽しいゲームを通じ、幼い子どもたちが考え、話し、人や物と関わるという技能を継続して伸ばすことができるよう設計されており、世界各地のユニセフの活動現場で使われています。

被災地の避難所の一画や屋外スペースに、「箱の中の幼稚園」を広げ、ボランティアが子どもたちといっしょに遊びます。家具メーカーからご寄贈いただいたマットがCFSに彩りをそえて子どもらしい楽しい空間が作られました。岩手県大船渡市では、地元の学生主催のイベントと



© UNICEF/NYHQ2010-0167/Noorani
「箱の中の幼稚園」のパズルで遊ぶ
ハイチの子どもたち

連動して屋外にCFSが作られたり、宮城県石巻市では、「ちっちゃな図書館」プロジェクトで集められた絵本が届けられ、兼図書スペースとして開かれるなど、各地でユニークなCFSが実施されました。「子どもにやさしい空間」の定期的な実施後、保護者の方々からは「ここで遊ぶようになって、思いきり遊

んで疲れるせいか、子どもが夜よく眠れるようになった」「ぬりえに選ぶ色が暗かったが、最近は明るい色を使うようになってきた」と、子どもたちの行動に変化が表れているとの報告がありました。また、「子どもを見ている間、家族が身の回りの後片付けをしたり、休むことができるので、助かります」というお声をいただき、周りの大人のストレスを緩和することにもつながっているようでした。



© UNICEF/NYHQ2009-1037/Markisiz
コペンハーゲンの物資供給センターから届けられた「箱の中の幼稚園」

「箱の中の幼稚園」に入っている教材

*は各教材の対象年齢層

| | 教材名 | 乳児 | 1～3歳 | 4～6歳 |
|----|-------------|----|------|------|
| 1 | ボードパズル | * | * | |
| 2 | チェーンパズル | * | * | |
| 3 | 絵本 | * | * | * |
| 4 | スポンジボール | * | * | * |
| 5 | 形あわせ | * | * | * |
| 6 | 紙とクレヨン | * | * | * |
| 7 | ひも通し | * | * | * |
| 8 | 指人形 | * | * | * |
| 9 | スタック&ソートキット | * | * | * |
| 10 | ドミノ | * | * | * |
| 11 | 積み木 | * | * | * |
| 12 | 粘土 | | * | * |
| 13 | パズルブロック | | * | * |
| 14 | 記憶ゲーム | | * | * |
| 15 | 計算パズル | | | * |
| 16 | ジグソーパズル | | | * |

遊びのパワー

日本ユニセフ協会は、日本プレイセラピー協会と協力して、CFSにかかわるボランティアの方々を対象に「プレイセラピー」の研修を行いました。「プレイセラピー」とは、子どもとセラピスト(治療者)の適切で特別な対人関係の中で、安全な環境と遊び道具を使って、子どもが自分の気持ちや考えや行動を表現したり、探索したりするのを、プレイセラピストという大人が促進し、手伝うものです。(日本プレイセラピー協会より)



©日本ユニセフ協会/2011/K.Goto
福島県で行われた遠足に
参加した子どもたち

この「プレイセラピー」研修は、被災地の幼稚園、保育園の先生方、また、保護者の方々にも実施されました。日本プレイセラピー協会代表・理事の湯野貴子さんは「子どもたちは、体験したことを遊びで表現します。子どもたちが震災に関

係した遊びをしていると、まわりは心配しますが、子どもたちはその遊びを通して気持ちを整理し、困難を乗り越えるべく対処しているのです。優しく見守ることが必要です。」と話します。

また、心のケアの一環として、避難所での生活や原発事故の影響で外遊びできない子どもたちが安全な場所で思いきり遊べるよう岩手県、福島県で「子どもバス遠足」を実施してきました。

遊ぶことで子どもは学習します。子どもがもっとも脳を働かせるのは、遊んでいるときなのです。子どもの権利条約の第31条【休み、遊ぶ権利】には、「子どもは、休んだり、遊んだり、文化・芸術活動に参加する権利があります。」と定められています。災害発生から間もない混乱期には、ともすると忘れられがちな娯楽も、子どもたちに日常生活を取り戻していくための復興支援の段階ではますます重要になってきます。ユニセフは「遊び」という子どもにとっての日課を続けることによって、困難な時期にあっても子どもたちが心を落ち着け、傷をいやす手助けとなることを願っています。